



講演録

2007. 5. 9

演題 「行政に頼らない地域づくり」

講師 鹿児島県鹿屋市串良町柳谷自治公民館
館長 豊重哲郎 氏

平成19年5月9日 サザンクス筑後小ホール



みなさん、あらためまして、こんばんは。豊重でございます。講話に入る前に、桑野市長さんから功労者として受賞された皆さん、本当におめでとうございます。また、区長として任命を受けられたリーダーの皆さん、エールを送りたいと思います。頑張ってください。手話の皆さん、今日は本当にありがとうございます。

今、鹿児島のローカルテレビ局が、大体2～3カ月に1回、小さな活動そのたびに放送しているものを、了解の基で収録し、ご覧いただいたところです。皆さん、いかがご覧いただいたでしょうか。見せるために、行政を頼らずして、地域再生に向けて活動したのではありません。今、道州制に向けて、10年、20年先には動いていますよね。だけど、小さな集落、一つの行政区に元気ができれば、逆転の発想でこれが積み重なって行って、細胞がまとまって行って、県も国も元気になる。まさしく、入口が、集落、行政区だと私は思いました。いつもは65歳前後で、1年交代の輪番制で自治公民館長を仰せつかっていました。ところが、55歳のとき、私になぜか「10年早いけど」と託されたときに、「やねだんを変えて見せる」とは叫ばなかったけれども、その気骨を持ってスタートしたのが、本当に何も無い集落の活動でもありました。

そのときに、3つの提言を公にしました。その一つは、「行政はパートナーが良い」ということ。集落に11人の役場職員が居る。その人たちに頼っただけで、前に進むことができる、できる範囲の、自分たちの集落のことは自分たちでやろう。これが、本

当は頼っているけれども、行政に頼らないということ。2つ目には、「文化向上」ということが、永遠に私の頭から離れません。

10年後、20年後、6万3000弱ある日本の集落が、400も1000も消滅していくという先を読んだときに、若い人が出てこない高齢者だけではその集落はつぶれていく。日本一の集落をつくるためには、対応処置策だけでは駄目だ。外からの羨望も含めて「やねだんで住んでみたいな」というさきがけを何でやっていくか、感動と感謝の活動をやっていくためには、未完成の魅力のある子どもたちの頭の中には、いかにして「住んでみたい」という待望論を入れていくか、私が考えたてきた10年目にやっと文化向上のための芸術家が地域に入ってきて、今、活力が出てきているところです。そのために必要な、青少年教育、生きた福祉、環境整備、この3つを言ったのが11年前でありました。3つ目は、補助金でなくて、寄付でなくて、会費拠出金でない自主財源を、高齢者の長年の農業体験と畑の休遊地に求めれば、そこで教育的な場もでき、300人の面識どころじゃない、フルネームでみんなの笑顔の青年教育ができて、収益金が出て、還元していければ、集落の知恵は次から次へ出てくるよねってことです。

現在、私は、もう譲ろうと思っていましたけど、またあと1年やってくれということで、12年目をスタートしたのが今年であります。こういったことを含めて、一つずつ、あせらずジャンプしないで、一歩ずつ確認しながら、感動と感謝で命令形のない参加を企画として出してきただけのことです。

それではパワーポイントを見ていただきながら、ひととおり、大事なところは突っ込んで説明をさせていただきます。

みなさん、私は学歴がないんです。串良商業高校卒業です。高校で「おみや、東京の銀行に行け」と言われて、「はい」と言って受験したら合格しちゃって東京いっちゃったのが18歳でした。このときに、私は、学歴偏重をじかに感じ、「支店長にもなれんわ、僕じゃ。」「やめだ、もう帰って、男一匹、1年間に1億って仕事できないかな」と思って帰ってきて、父親から怒られました。「誰も勤めることができない東京の銀行をなんで辞めたのか」と本当に怒られました。

これだけみなさんの中ですから、どんな体力の挑戦をされた体験者もたくさんいらっしゃるでしょう。その18歳のときから66歳の今まで、私の体験で死ぬ体力の限界、死ぬ思いをしたのが、これでした。ところが、これ、たった220キロ、軽井沢まで、東京から、あのサイクリング車で、ああやって。見てください、碓氷峠っていう、今でこそバイパスができていますが、ここは、184カ所のカーブ、9.6キロメートルずっと上っています。ノンストップで17時間、サイクリング車で体力限界、「やってやれないことはないよね、俺のこの体力で」って体験し、死ぬまで現役の意志力とアイデアの要請は、知・徳・体ではなくて、体・徳・知の時代をつくっていくことが地域の青少年教育の原点だと、このときに、自分で、体験しました。2つ目は川口湖の1合目からご来光を仰いで、御殿場まで、あの富士山を体験したこと。これも、同じ年であります。これが私の最高の無限の体力への挑戦でありました。

父親の反対を押し切って帰ってきてから、「行政、ならないか」「鹿児島銀行に入らないか」、父親は同情的に就職先探しに汗してくれた経過をしりまし



難所、碓氷峠9.6km
カーブ184ヶ所がある、急な上り坂を
ノンストップで、達成！！

「あ〜…疲れた…馬鹿な事を…。二度と経験したくない…」いろいろな思いが頭の中を駆け巡った。今までの人生の中で、最高の体力限界の挑戦であった。

(18歳)

男だ！ やってやれない事は無い！

※ 1

た。しかし、辞めて帰った以上、「男一匹やってやれないことはない」と言って、うなぎの養殖を大隈半島で、無学で一番最初にスタートしました。10年間で3,000万円の大借金をつくって、元利合計で5,000万円、55歳までに返済をする入口がうなぎの養殖でした。返済の基本が「うなぎの川豊」といって、大切な小金の蓄積で60歳まで。40歳からスタートしたうなぎのレストランを20年間で返済すると思っていたところが、15年で返済が終わりました。23万円する店舗を借り、家賃を払いながら子ども3人を大学校に出し、一番遠いところではポストン大学校に末っ子を留学させて、人生55歳で、やっと人並みの、借金0になって、他人に川豊を譲って、我が家に帰ったら、「哲郎が帰ってきた、もう彼に（地域を）託そう」とした入口だったんです。

地域が再生するためにはイベントだけではだめですよね。だから、ビジネス的な感覚と地域の経営学を共有したリーダーになろうと思いました。右側が、私がうなぎのエキスを抽出・開発に成功して、うなぎの川豊を辞めても、孫の代までこの特許商品でやっつけけるパテントを取れないかと努力した、私のビジネスだったんです。これが、今、ヘルプアイ本舗として、山形屋っていう大きなデパートを基本にして、メールや通販で販売しているところです。私の収入源は講演料ではありません。このヘルプアイ産業の開発商品メーカーであると同時に、小さな収益活動をやっているところです。

～ 私の挑戦！ ～



富士山登山

S. 36



※ 2

そこでみなさん、これを見てください。これがあるから私は思い切って次から次へ、この歳でアイデアを出せるんです。なぜかといったら、私は（東京から）帰ってきて昭和46年から20年間、上小原中学校男子バレーの、大晦日まで練習して元旦から練習初めという鬼コーチをやって、全国大会にもでました。これが、私の大切な青少年教育のマーケティングでもありました。国は日英交流事業として、イギリスに青少年育成のために全国から14名派遣し、私もその一人に選ばれて、イギリスも学ばせてもらいました。

人間は必ず社会に貢献する何かを与えているんです。自分を見捨てないで、価値ある感動さえ発見すれば、居眠りどころじゃなくして、1日の時間が足りないくらい汗が貴重な、自分太りになるということを意味してるんです。これしかないでしょう。今の子どもたちはどうだとか、インドアで外にでないでどうだとか、道徳がどうだとかという問題の前に、地域の青少年、人間大変革を、子どもたちが考えさえすれば良いのです。

42.195キロメートル、いまだに、これ、続いてますよ。こうやって10時間、真夜中の10時にスタートして、翌日の7時前後にゴールをあるき始めます。なぜ、この発想ができたかという、18歳の時に17時間、サイクリングで限界に挑戦したあの発想から、「やればできる、ゴールのテープは自分で張って自分で切るもんだ、こんな感動をなぜ子どもたちに伝えられないのか」という発想がこれだったんです。

これは滝つぼです。寒いと思ったら、普通は服着ますよ。僕は逆に脱いで、地べたにアースして、しばらくおいたら、まちがなくなると人間のイメージは逆転の発想で自信がついてくる。滝つぼに飛び込む、座禅を組む、2時間ですよ。

寝たきりの頭に声をもっていくよりも、生き物を養育して、寝たきりの頭に鈴虫置いてあげたらという発想から、鈴虫の成育と寝たきり慰問が続き、その中で寝たきりの人の「死ぬ前に申良の花火大会見てみたい」という人の発想から、慰問していた高校生が「だったら移動して慰問を花火観戦に」って動いて感動の体験をしましたよね。

これは、2キロのフラワーロードを古タイヤとうなぎのざるを活用して、高校生で環境整備をおこなったもの。

これは昭和58年です。この当時、昭和55年前後、非行少年の第2の谷間と言われた時代が到来したんです。高校生の金属バットから中学生に低年齢化した

第4回全日本バレーボール
中学生選手権大会 出場(昭和49年8月)



昭和46年から平成2年まで20年間
上小原中学校にて、鬼コーチとして青少年教育に挑戦
(29歳～52歳)

※3



※4

時代です。その対応で学校がまいった。だったら非行から更生した青年団までを統団して、しつけの入口、原点、非行の入口を学ぼうと、これをロングランで6ヶ月間実施し、1,200人が聴講しました。

これは学寮（通学合宿）ですが、鹿児島県で一番最初に行いました。7泊のテレビも見ない、遊び道具もない、親も一緒に寝泊りできない学寮をスタートして、今これが、鹿児島県ではどんどん展開をしている状態です。

私のところは、ここみたいに交通の便が良く、流動的な拠点場所ではありません。空港からマイカーで2時間かかる、とんでもない田舎の町に誘客するために芋ほりツアーを計画して1,700名が来ました。

人集めが大変なのは、誰も異口同音にそう言われる。10月10日、いまだに校区を挙げての運動会をやっています。ところが、500人も集まらない。選手選別に大変な時期で、このときに私が考えたのは、文化と体育をセパレート活動、文化の日は文化活動だけでは駄目だ、運動会の昼食時間に文化活動のモデル的な有名なものをもってれば、観衆は集まらないかなって実施したのが、これでした。この、やがてオリンピックに行った、鉄棒の人たち、芸能文化のプロを呼んだ

りして、体育と文化を融合して、運動場に2,000人が集うところまで展開し、すごい期待の活動に変わってきたんです。

これは、警察署が動き出して、非行防止に何を提言したら良いかって、私のところに来たので「暴れん坊サミットやろう」と、手に負えなかった暴走族、いろんな体験者を壇上に上げて、しつけを学ぼう会の2弾として、警察署主催で行いました。みなさん、これが、捨ててあるものを再利用する活動資金の第1弾であります。県からは優秀賞をいただきましたが、捨ててある孟宗竹を細工して額縁に変えただけです。左の写真はさつまいもではなくてサトイモです。春先に芽がでてきたのを見て私が思いついたのは、鉱泉水を活用し、酸性ではない、弱アルカリ性の焼酎をつくり、健康焼酎として世にだしたらどうなるかっていうことです。あの時期の思いつきで、串良小町というサトイモ焼酎を製造したのが昭和60年だったと思います。

これから柳谷の底力を少し見ていただきます。これまでは、私が校区公民館長時代のいろんな体験を、自分でまいて感動して、そして収録したものでしたが、これを基本として、私の心から「柳谷をどうやって動かすか」と実施したのが、拠点場所づくりでありました。たまたま、20アールの土地が集落のど真ん中にありました。この茅場を活動拠点とし、串良町の土

木建築課をお願いして、盛り土のために3メートル、20アールの土地で、転圧しますから7000立米の捨て土を、優先して捨ててもらいました。「ひと山どれでもどうぞ」という木材の提供者を含め、300人で手作りして公園拠点場所ができ、今は、視察の際に大型バスがUターンできる駐車場に変わって社会に貢献しています。

私が一番最初に行ったのは、資金財源のために高校生に呼びかけてクラブをつくりました。「飛行機に乗って東京へ行って、オリックスイチローの野球を見にかんか」って呼びかけたら組織がすぐできました。「行く、行く」ってなったけど、金ないから、じいちゃん、ばあちゃんたちを動かすために、休遊地を借りて、芋植えを提言して、資金稼いだら見に行こうって言ったから、さっと組織ができました。僕でなかったらこの知恵は浮かばなかったと思う。この知恵がなぜ浮かんだかというと、バレーボールをずっとやってきて「1回でいいから、負ける前でいいから、県の大会でコートに入りたい。」「それを親から写真に撮ってもらって一生の宝にしたい」っていう子がいっぱい居るんですよ。私が、本物を見せれば、本物を提言すれば、必ず動き出すと考えたのが、この組織でした。

こうやって、30アールでスタートした高校生クラブが、後に1町歩増え、なんと100人集まりますから、たった3時間で植え付け終わります。労賃がただですから、80万円前後の収益になります。



※ 5



※ 6



※ 7

地域再生は、模倣、マネでは駄目だと思います。マネも必要だと思いますが、一番大切な、一番出やすいアイデアは、地域集落で不満なことを列挙することなんです。不満、「不」のつくもの、不満だったり、不可解だったり、不便だったり、「不」の提言を聞くリーダーになって、この解決を地域再生のテーマになってなると、一番最初に出たのは、牛の糞の垂れ流しを止めさせろということでした。去年、合併したから106,000人の都市になりましたが、串良町には13,400人しかいません。串良町13,000の人口で、畜産、牛・豚・鶏の総生産額は150億円なんです。農業総生産額は50億円しかないんですよ。牛は1頭で1日いくら排便すると思いますか。平均18キログラムです。うちの集落で200頭前後、串良町では17,000頭くらいの牛が常時居るんですよ。この糞が垂れ流しで、野積みされ、ハエが発生するんです。この不満解決になった、「腸内で好気性の微生物が活躍して消化活動に力を加えて、排便したそのものが分解していれば、ハエが発生するような匂いは消えるよ」ということは、やってみてはじめて分かったことです。ここから米ぬか100%、土着微生物の活動に入り、このことを新聞は「臭気とハエが消えた」と書きました。

こうやって1年間、80歳代を筆頭にして朝5時半から毎日1時間、スコップで攪拌作業をしてもらいました。これがその当時のリストです。私は、このリストづくりに泣かされました。こうやって1年間やった後、将来的に環境貢献社会にもできるから、土着菌自動化センターを造ろうと1町歩のカライモ益金から60万円する重機を購入をしました。好気性の菌ですから、乳酸菌が発酵し、嫌気性になって腐っていくことを防止するために、毎日、空気を入れ替えるための攪拌が必要でしたが、おかげで攪拌手作業がなくなり、今は、この人にオペレーター料として月に30000円支払っています。

私は、今までの科学肥料と堆肥をつかった栽培を、着微生物をまいてつくったらどんなことになるかということで、農業改良普及所も一緒になって、これを考えたんです。食物の原点は自然農業なんです。食物が本当に欲しいものを地力として養分が保持できていれば、病害虫もさることながら、安全食ができるはずだと思います。

植物は光合成作用、炭素作用によって、今度は、根っこから排泄物を出します。排泄物をえさにしてたかってくるのが微生物であります。微生物は逆にアミノ酸



※ 8

や脂肪、蛋白などを分泌していきます。それをまた、植物が根っこから吸収していくという相関関係にあるんです。これを駆虫剤や除草剤に頼ると、微生物も死んでしまい、生育に必要な養分を科学的に肥料という形でやらなければならない時代が、科学発展による人工公害的に続いてきました。自力で自生できる力が、地力に今求められようとしているんです。

今度はミミズが微生物を食べます。ミミズ1匹で1年間にどのくらい量の排泄物をだすと思いますか。私の学びでは、2リットルのペットボトルで、10本から15本。20リットルから30リットルです。10平方メートルに100匹居たとしてください。100匹かける20リッター、30リッターしてください。耕運機がいますか、いらないでしょう。また、球状の土は、必ず空気穴がいっぱいあります。空気穴ができると、酸素、空気があるから地温が上がるんですよ。昨年の5月29日に出された法律はポジティブリスト、ご存知でしょう。無人販売や、市場へ柳谷出身の豊重が出荷し、それをチェックされたとします。そして0.1ppmの残農薬があったとすれば、豊重が住んでいる柳谷エリアの人たちの出荷が停止される、地域ごとに残農薬基準を守らなければいけないという、新食品衛生法を出したのが、ついこの前ですよ。みなさん、この差ができてきているんです。

これはたまねぎですよ。こちらが、これまでの方法でつくったもの、向こうが土着菌をまいたもの。今、山から、落ちているぬかごを拾って、1年間かけて土着菌で再生すると、2年目にはすごい自然薯ができるんですよ。鹿児島ブランドのかるかんは、この自然薯でないと、値打ちが下がるから、台風の翌年は、自然薯のやまとりができず、かるかん製造はぐっとコンパクトにされて、空港でも販売台が狭まっていった過去がいっぱいあるんです。



自然薯



ほうれん草



桜島大根



チンゲン菜・みず菜

※ 9

左は桜島大根、上、ほうれん草。これがぬかごをまいて1年目の苗です。これを5センチくらいの幅のスレートの上に2本くらいずつのせて、1年間ほっておきますと、さっき出たあの自然薯が生産として活躍してくれるんです。

これがたった80キロから100キロ、土着菌を水稻にいただけですよ。みなさん、どこを見られますか。色も、株もさることながら、大切なのは、植物は全部、90度に葉っぱが立つというのが、植物が求めている大切な光合成作用の基本なんです。こんな葉っぱになったらスプーン葉といいます。スプーン葉になったら、光のあたり具合が半減どころではなくして、弱ってくるんですよ。90度に立ったら表裏いっぱい光を受けることができます。キュウリでも、トマトでも、何でも葉っぱが立ってる朝というのは、間違いなく毛根の貼り具合が違う、これが、植物が求めている大切な地力の効果です。

柳谷は、田舎で286人しかいません。今、12名増えましたから、300人になろうとしています。高齢化率は35%になりました。2年前に僕が人工推移と高齢化率を計算したら、あと8年後には47%になる予定なんです。だから、物理的に1町歩のカライモ生産は、高齢者が動かなくなりますから、減らさなければならぬんです。しかし、財源は欲しいんです。

そうしたときに、集落では、(生産を)コンパクトにした山芋つくって、この規格外を他の市町村の加工グループに「この食材で、この商品できませんか」って言って動きはじめて2年たとうとしているんです。これが当たりましてね。今、画家がきましたから、画家に「あれこれシリーズ山芋入り」の絵を描いてもらったんです。ここに書いてある、「あれあれ」とは、山芋をつかっていて、出汁をとる必要がない。すき焼きでも、丼ものでも、これさえ入れれば良い。醤油もいなければ化学調味料も何にもいらない万能タレが「あれあれ」。今月の20日頃には「それぞれ」という商品がでてくるんです。それは何かというと、自然薯のスティックなんです。高くつきますが、これからの大切な食のためには、安全でねばねばしたこういったものを的にしたっていうのが、私には最高に良かったと思います。今、これらの商品は、ひっぱりだこです。

「あれ」、「これ」、「それ」っていう発想の知恵は、中学生からですよ。「おい、名前をつけたいんだけど」と言ったら、「あ、おじさん、あれあれが良いよ」と。「何で」って言ったら、「うちの子供は、ぐれぐれって言うよ、これこれを」っていう話から「これこれ」っていうのが、出てきました。私が講演で「次なんだと思いますか」と言ったら、みんな「それぞれ」って言います。

こうやって、食材を畑の土で復活をさせて、それを加工までもっていくのは大変なんです。だから、加工は指定管理者制度になる行政の加工所をつかって、製造元であるグループに加工させ、お互いが連動しあっていたのが、この商品であります。

ビデオの中で足浴を見ました。食品分析センターで分析したら、酵母菌、 1.5×10^6 っていう書いてあります。 1.5×10^6 とは、酵母菌が、1グラムに150万個、土着菌の9割入っていますよということ。この証明書をいただいたことが決めてになって、安全だからどうぞ手浴、足浴やってくださいとなった。

安全食材で焼酎をつくりました。年間だいたい5000本、なかなか手に入らないくらいです。ロックで飲むとすごく良いのですが、今日は、市長さんに持ってくるのを忘れちゃった、申し訳ありません。



※ 10



※ 11

みなさん、我々の管内でも集落には空き家がいっぱいあります。特に馬小屋、牛小屋、豚小屋は崩壊寸前。その下を見てください。明治時代からの、民芸品を含めて農耕作業でつかっていたものなどの宝庫です。今日7名の功労者の表彰がありましたよね。集落では、生きているうちに、叙勲してあげようと「ごくろうさん、あんたがおったから丸太小屋ができたんだよ」といって表彰する代わりに、柳谷の歴史人たちコーナーの計画をしたところでもあります。行政区や集落、町内会は行政の駐在員役で十分なんです。だけど、もっと感動的な集落にするためには、財源が欲しい。自由に活動できる金が欲しい。だから、稼いだ金はテレビであった緊急警報装置、煙感知器といった生きた介護のために使います。

これが12年前にスタートした高校生クラブの結成式。この人たちがカライモ植えを叫んでから、1町歩までできましたし、高校生は15夜にバナナの叩き売りをする、パイロットの服を持ってきてファッションショーをする。これがメッセージ放送、12年続きました。

こうやって集落では、3つ子の魂活動をやってあげることによって、子どもたちは無限への挑戦も含めて、やがて大人になって、地域ではいろんなことができて、最終的に一昨年には余剰金が400万に達しました。7,000円の町内会費を4,000円に減額しました。それでもまた去年は500万残りました。75歳以上は町内会費を免除しています。私が10年目に提言したのは、75歳以上の人は4,000円の町内会費を免除しても、その貢献に対して、何の現れもないから、1箇所に1万ずつボーナスやらせてくれっていうことでした。大切なのは、今が通過点だということです。300年前に7人の落人たちが柳谷に入植してから続いて、柳谷の自治公民館は、未だに亡くなられた方3人の名義のままなんです。私の10年間で18名の方が他界されました。そんな苦労の上にたって今

の私たちがいる。先人たちの偉業を、先輩の敬いの人生を、集落で、通過点である今、称えるために、副館長と1軒ずつボーナス袋を御霊に差し上げました。ほとんどの人が未亡人になっておられる家庭でした。泣かれました。だから、私は今、神が先導役とお守り役となって「健康な体をくれてありがとう」って叫びながら、大腸がんを患って5年といわれた私の体力で、今、挑戦をしている。

見てください。上は着工前の空き家です。警察は、空き屋対策マップつくって、時にはパトロールしてくださいで終わっちゃった。教育委員会も一緒。また、この眠っている財源を使って、柳谷を芸術のムラにできないか、これが私が考えた空き家対策だったんです。集落で手をいれたら、ここまで変化してきました。今、2号館、3号館、4号館と増え、4号館は築100年で、この後ろには40畳の部屋があって、夏休みには、APU、大分アジア太平洋大学から留学生が40~50人、長期滞在でやってきます。これが5号館で、今から手をいれます。あれが6号館。

こうやって、今7人の方々が入ってきています。陶芸家、写真家、画家、ガラスふき工芸士。8年前に閉店していたこのスーパーが、今、拠点場所としてギャラリーに変わっています。どう変わったかということ、月に1回、必ず芸術発表イベントをやります。面白いですよ、子どもが動きますから。



※ 14



※ 12



※ 13

私は情熱と汗だけは持ってるんです。人は命令形で動かしたらそれで終わり。人は感動を与えれば、必ず感謝で動く。これを誰がやるか、リーダーが不可欠。これが、私が考えているリーダーです。大きなリーダーは必要ないと思います。汗して、知恵をだして、1人でやらないで、3人、5人、集落ごと活動ができる。これが基本なんです。これを私はやってきただけのことであります。

これは、私が書いている著書です。私は最後に、こうまとめました。

リーダーよ覚悟しろ

企画実践したことに対する評価は甘んじて受けろ

満点のリーダーなんかこの社会にも居ない。

人間はまことに勝手なもので人の批判を平気でする

特に地域活動では、参加しないのに不平不満の論者がどこにでも点在している。

相手にないわけにはいかないが気にするな。リーダーへのありがたい羨望の表現とおもって前進あるのみ。

このときこそ忍耐と勇気、顔を上げて闊歩。

こんなリーダーこそ、国がもめている真のリーダーである。



一度きりの人生だから、社会に貢献したい。くたびれた地域には夢も希望も沸いてこない。私はこれで一生を終わる。こうやって自分のことを始めて書いた。大腸がん治療が終わり退院の日、医師が手を握った。「あなたは病人じゃなかった。」「誤診じゃなかったけど、99%再発しません」と言われた。このときこそ男泣きした。死ぬつもりで書いた。活動、バレー部のことも含めて。今、それから、ちょうど3年過ぎましたから大丈夫でしょう。リーダーは孤独です。一人になったら、本当に忍耐が必要です。だからこそ、私は「私たちは社会に貢献するために生まれてきた」という好転の発想、イメージで社会を終わろうと思った。

最後に、鹿児島県を含めて、まだまだ行政に頼らない地域づくりというのは難しい。だから私は申し上げたい。地域が、行政に頼らないところにまで進めるためには、なんとしても行政依存が必要で、手放しのところまでは行政がリード、支援役として絶対に必要なんです。このためには、行政マンにもエールを送りたい。外に出てリーダーぶりを発揮しながら、お互いに汗する存在の、地域の中の行政をパートナーと呼びたいんです。

みなさん、明るい話題提供と、その地に即応した地域づくりを、無理のない範囲で汗していけば、必ずお互いに明るい筑後市、明かるい柳谷、楽しい地域活動ができます。

皆さんの市は、立地的に、我々の集落と全然違います。新幹線はある、来て見ればホテルはいっぱいある。もったいない。これが最高のロケーションだと思うと、人が入ってこない。うちの集落は、4月で町内会に3家族12名が転入しました。7月までにトータルで21名入居してきます。300人を超えます。なぜでしょう。消滅していく集落の逆手取るわけじゃないけど、負の状況をいかに感動的な地域活性化に繋がられるかです。この条件のかなった筑後市、桑野市長の下で、すごい活躍で私たちをあっというまに飛び越して、今度は、やねだん焼酎を持って視察に参る時期がくるのではなからうかと思えます。大変長くなりました、どうぞみなさん自前の話で申し訳ありませんでしたが、エールを送って。「フレーフレー筑後市」頑張ってください。ありがとうございました。

※ 1～14 講演資料「感動の「むら」おこし(地域再生)H19.4版」より